

第五場 森の他の一部

シルヴァス(牧羊者)及びアイビー(前者の登場
思ひ者の登場)

シルヴァス

これモシ、アイビーさん、餘りといへば心強い、餘りといへば無情ぞえ。俺が厭なら厭でもよいが、何にもさうがみくと言はぬこと。鬼の眼にも涙とやら、日頃邪慳で固まつた獄卒でさへ、さし延べた囚徒の首に斧をあてる前には、一應宥恕を願ふとやら。お前はまづ人の血を流すが渡世の人よりも、モツと邪慳にする氣かいな。

と鬮子を取りて述べ、大氣取りの様子

ロザリンド、シリーア、コーリン登場、背後に控へる

アイビー

へん、妾はお前の首を斷る、獄卒に成りたくはありませんよ。お前に

疵でもつけては濟まないから、わざと寄り着かない事にするよ。お前は、今妾の眼が鬼殺しだといひました。まづ面白い！御尤もらしい！斯く弱々しい、温従しい、塵一にも喫驚して扉を鎖める程の眼の球をつかまへて、ヤレ鬼殺しだの、ヤレ人殺しだの、ヤレ犬殺しだのと言ふ氣なの？本當にお前のやうにイケ好かない男たらありやしない。眼で疵がつくといふなら、早速これでお前の事を殺して見るが善い。さ、氣絶の風でもおしよ。さのめって御覽よ。

一句々々に力を籠めて愛想つかしを井へ立てる、シルヴァス撲ぐられるのを畏るゝかの如く、一々手をあけて防ぐまれをする。

若しそれが出來ない位なら、妾の眼をつかまへて、鬼殺しなど、餘計な嘘を吐くものではないよ。さ、妾の眼がお前の何所に何んな疵をつ

けたか、お見せなさい。針で引ッ搔けば、幾らか疵痕が残り、背の上に凭りかゝれば、少時の間掌裡に壓しつけた痕跡位は消えずに居る。妾の眼は幾らお前を睨みつけたか、知らないが、些とも疵はつけはしない。確かに又眼には疵をつける程の力がありはしない。

ウシ
イル これさ、モシ、ファイビーさん、何時かその内——事によつたら、案外近い内に——お前がファイと美しい御方を見そめ、ぞと戀風の身にしみる事がないとも限るまい。眼には見えねど、戀の矢疵は深いもの、その時はツク／＼思ひ當るであらうわいな。

17
イ ても、其様ナ時節が来る迄は、妾の傍に寄りついて貰ひますまい。若し又いよ／＼其様ナ時節が来たなら、思ひ存分この妾を嘲笑つて呉れるがよい。御遠慮には及びませぬ。妾の方でも、お前に對して遠慮な

どはしませぬ。

ロザリンドづか／＼と進み出る

リ
ザ それは又何ういふ譯ぢや。お前の母親は侯爵夫人か何ぞで、それ其様ナに、ノベツ幕なしに、意張り散らし、ほざきまはるのか。何んぢや、お前の顔は——

と凝乎とファイビーの顔を見つめ乍ら

先づ美人といふ柄でもなく、闇に置いて光るほどの標致でもない癖に、何所に高くとまつて、無情い顔をする筈がある。——

この間ファイビー惚れ／＼とロザリンドを見つめる

これ／＼お前は何をするのぢや。何故さうしげ／＼と私の顔を睨視するのぢや。お前の顔の造作は世間有り合はせの普通の品別にこれぞ

といふ個所もない。——先ア呆れるではないか。あの顔て人を迷はする氣と見える！

とこれはシーリアに向ひていふ

イヤ、コレ高慢チキな娘さん、是非こりや断念めて貰ひたい。いかに眉毛が墨のやうでも、頭髮が漆のやうでも、眼球が瑠璃のやうでも、頬の色が乳皮のやうでも、そんなものでこの私が、お前の爲めにムザくと勝にはなりはせぬ。

今度はファイビーに背を向けてシルヴィアスに向ひ

お前も又何といふ活智なしぢや。何故南風のやうに何時も雨模様で、この女の後尻ばかり吹き廻して歩くのか。お前の男振りには此奴の女振りよりは千層倍も立派なものぢや。お前のやうな痴者が居るから

世間に醜い子供が多勢殖えて困るのぢや。此奴を増長させるのは、姿を映す鏡ではなく、お前の口から出る諛辭ぢや。映る眞の姿よりも、お前の爲めに自分の縹致を買ひかぶつて居る。——

更にファイビーに向ひて聲を勵まし

これ娘さん、よく自分の身の程を知るが善い。腰をかゝめて、手をついて、茶断ち鹽断ちなりとして、斯んな立派な男から戀ひ慕はれることを神様にお禮をのべるが善いぞ。折入つてお前に忠告をしてあげるが、すべて物は買手のついた時に賣るが得策ぢや。お前などは何所の市場に持ち出ししても必らず賣れ口のある貨物ではない。早く男に慈悲を願ひ、精一杯可愛がつてあげて、ハイと言ふて承諾の旨を答へるが善い。醜い顔のものが高慢な顔をする時ほど、それ程醜い事はない。

再びシルヴァスに向ひ

と斯んな譯であるから、お前も辛抱してこの女を女房に貰うてやるサ。さア早う歸るがよい！

ファイ アレ御願ひでムンす、せめて一年も叱り續けに叱つてくださんせいナ斯んな男に口説かれるよりは、お前さんのやうな御方に叱られる方が幾ら嬉しいか知れませぬ。

フロザ オヤ〜醜い女の面に惚れる男があるかと思へば、人の劍突に惚れて呉れる女もある。さういふ譯なら、女の方で憎々しくお前を睨める度に、私は精一杯女の悪口を言ふとしやう。——これさ何故さう私の顔を見るのぢや？

ファイ でもお前さんが憎くも何ともないものを。

フロザ コレ〜お願ひぢや、萬望私に惚れるのは廢して呉れよ。酒の上の空保證同然私ほど當てにならぬ者はないのみならず私はお前が蟲が好かぬ。——

とファイビーを見あげ見おろしてさも厭らしいといふ面持

尤も是非私の住家を知りたいなら、爰から遠くもない橄欖の森彼所ぢや。——さア妹、歸りませう——

シルヴァスに向ひ、

若い衆さん、お前一生懸命口説いて見るさ——さア妹早うムれ。——

とシリリアを促して出懸けしが、再び振りかへりてファイビーに向ひ

善いかい、娘さん、少しは優さしくしてあげるが善い、高慢な顔はせぬことぢや。世界中を搜したとて、あの男ほどお前の標致を買ひ被つて

呉れる男はない。さう、これから牧羊の番をするのぢや。

とロザリ、シーリ、コーリ三人退場

フィービー三人の後姿を見まもりつゝ

171 芝居の文句にも、一目見て惚れないものは惚れはせぬといふが、成程甘い事を言つたものだねえ。

172 ヴシイル モシ、フィービーさん……

173 何の御用？

と向ふを見たまふ

174 ヴシイル フィービーさん、可哀相と思ふてくださいよ。

175 176 そりや妾だとしてお前が氣の毒でなりませぬ。

177 ヴシイル 氣の毒と、色よき返事とは、毎度付き物、若しもお前が、眞實私の苦勞

を氣の毒と思ふてくれるなら、親切な言葉をかけてくれるがよい。お前の氣の毒も、私の悲傷も、たつたその一言に消えるわいな。

178 コレ、シルヴィアスさん、妾は何時かお前を憎らしいと思ふたこともありましたが、今は決してさうは思ひはせぬ。と申して又別に戀しいの、慕はしいのといふ譯でもありませんよ。たゞお前の口説上手な所が氣に入つて、以前ほどはうるさくもなく、側に居ても辛抱か出来さうになつたのでムンす。これからは時々用事を依みます。しかしたゞそれ限ですよ。妾から用事を依まれるのが難有いと思ふ丈で、その上増長はなりませぬぞ。

179 ヴシイル あゝ私の戀は自分一人の片思ひ、今迄相手にもされずに居た情ない身の上故、それ丈で辛抱して居ます。誰かゞ悉皆收穫を濟ませた後

の落穂拾ひて往生して居ます。たゞ時折は笑顔の一ツも拜ませて生命継ぎにしていたゞきます。

「それはさうと先刻妾と對話をしたあの若者を知つて居るかいな。」

シルヴァイアス 聊かむつとするこなし

「深くも知らないが、逢ふ丈は幾度も逢つたやうだ。先の地主どの、」

家邸を譲り受けた男で……

「アレ妾がアノ人の事を聞いたとて、何にも惚れて居ると思つては困りますよ。随分人の悪るい小僧さんだこと！——尤も辨舌はよくまはります。尤も辨舌などは何うでもよけれど、でも聽者を嬉しがらせる所を見ると善いものです。一寸顔も奇麗……尤も格別奇麗といふ程でもないが……あれで中々權式振つて居ますが、て

もそれが大變似合ふから可愛いわ。屹度今にお立派な殿御になりま
すよ。一番善いのはあのお顔の色つやぢやありませんか。そして口で
散々悪らしい事を言ふても、あの可愛い眼が傍からさささと癒して行
くから難有いわ。身材は先づ別に高い方でもないでもあの年輩にし
ては高い方です。あの脚部はあれは尋常の脚部だけれど、矢張善い
事は善いわ。又唇の色と言つたら、ホンに奇麗な茜色頬にさす朱色に
比べるといくらか深くて、先づ紅と紅白咲き分けの薔薇とをならべ
たやうだわ。シルヴァイアスさん、若し妾のやうに一個々々眼をとめて
見るものがあつたら、随分あのお方に迷ふ女が多いかも知れません
わ。併し妾などは迷ひもせぬが、さりとて憎くもないでも、何方かと
言へば憎んであげて善い譯です。彼様ナに妾の事を悪口する道理は

ないぢやありませんか。妾の眼は墨のやうで、頭髪は漆のやうだなど
 と言ひました子。そして、さうく散々人の事を貶しました子。何うし
 て妾は口返答をせずに居たかしら。しかし其様ナ事は、ま、何うでも善
 い。細工は粒々仕上げを御覧じろ。これから毒吐いた手紙を送つてや
 る。使者の役目は是非お前さんに依みます。依まれてくれるでせう子
 ？

ときはめて優さしく言ふ

ツシル エ、お易い御用で……

171 それでは早速書きますよ。先づ彼事を書いて——それから此事を
 書いて……思ひきつて手酷く無愛想にしてやりませうよ。さ、御一所
 に、シルヴァスさん。

と兩人退場

第四幕

第一場 森の中

ロザリンド、シーリア及びゲエイクス登場

クゲエー 以後は君、お互にモ少し別戀の仲にならうぢやないか。

ロザリンド 笑ひながらゲエイクスを見あげる

ロザリ ても貴下は陰氣の蟲ぢやといふ評判ではありませぬか。

ゲエー いかにもそれに相違ない。拙者は笑ひ上戸より苦虫を噛みつぶした方が好きぢや。

ロザリ イヤ何方も度を過しては世間の鼻摘み、口善悪ないものから、お定まりの蔭口を叩かれます。

ゲエー ても、愁容をして黙つて居るのは悪くはないものぢや。

ロザリ オヤ、それが悪くないなら、島中の案山子なども悪くはない。

ゲエー 抑も拙者の憂鬱症は、無論勉強の結果たる學者の憂鬱症にもあらず、氣紛れから湧き出でし音楽家の憂鬱症とも異なり、又意張つて見たい内裏人、野心に渴する軍人、政略から割り出す法律家の澁面、氣六、敷い所から來る貴婦人のしほれ顔、但しは、又是等全體の元締、何れも此れも寄せ集めた戀人の厭世主義等でもムらぬ。全く以て、拙者專賣の憂鬱症、百草を練り、萬物を乾し固めて製しあげたる天下無類の品ぢや。これと由すも日頃旅する浮世の巷見るにつけ、聞くにつけ、自づと催す沈思黙考、いつしか異彩を放つ所の一種の憂鬱症にかゝつたのぢや。



リザロ こそし経の験の陰で陰に
る。—— イヤ私なはどは験を積んて
陰にるよはり……

リザロ 大變な旅行家でムリま
すナ。こりや確かに陰氣に
ならなければならぬ理由
があります。多分貴下は御
自分の地所をお賣りにな
つて、そのお金で他人の地
所の見物にお出懸けにな
つたのでせう。見るものば
かり澤山見て、手に入るも
のが無一物では、眼が肥え
るにつれて懐は瘦せるば

かり、不愉快な筈です。

イヤ、之によりて獲得したる経験は大したものぢや。

そしてその経験のお蔭で陰氣になる。—— イヤ私などは経験を積
んで陰氣になるよりは、期間でも引き連れて陽氣に騒ぐ方が賛成で
す。加之之が爲めに、わざわざ旅行などは御苦勞千萬！

オルランド登場、足早に

ヤ今日は、ロザリンドさま！

ロザリンドはオルランドの來ること運きを怒るが故に之に頓着せぬこ
なし

拙者はこの邊で切り上げて退却致さう。此先生に臺詞もどきの文
句で喋られてはやりきれない。

リロザ それなら何れ又旅行家先生！

と立ち去らんとする。サエークスの後姿を見送り乍ら

貴下などは成るべく捲舌で風變りの衣裳でも着て、そして自國人の缺點でも散々拾ひ何所ぞ他の邦土に生れなかつたのを残念がり、自分の面容に就いての不足でも神様に並べ立てるがよい。さもなければ、ヴェニスのごンドラの味を知つた旅行家とは受けとれない。

とサエークス退場

オヤお前はオルランド殿今まで何所て何をして居ました其様ナ事
て戀人もあるものかいナ！若しも二度と斯様ナ真似をするなら、モ
ーモー私の前に顔を出すことはなりませぬ。

ラオル でもロザリンドさま、まだ一時間とは遅れませぬ。

とからかひ氣味、ロザリンド躍起となり、

リロザ エッ戀する身に一時間も遅れる！一分間を千分して其一分なりとも破るやうでは、それではホンの戀のなりかけ、まだキュービッドの矢の根が胸に立っては居ぬ。

ラオル 重疊相濟みませんでムりました、ロザリンドさま。

と尙ほ眞面目にならず

リロザ イヤ其様ナに恐圖々々して居るなら、モー！私の前に顔を出すことは爲りませぬ。それよりか私は蝸牛を戀人に持ちます。

ラオル ナニ蝸牛？

リロザ え、蝸牛です。蝸牛の歩行は遅いけれど、頭の上に家を御持參て來る、お前の財産などよりは屹度その方が氣がきいて居ますよ。——兎

に角私の事を口説いて見るがよい。私は今お祭機嫌のうかれ氣味、お前の注文を二ツ返事できいてあげるかも知れない。一體何んな事を被仰る所思です。若しこの私が正眞のロザリンドに相違ないものとさめたなら……。

ラオ 何んな事も言はぬ中に先づ接吻してやります。

リロザ イヤ矢張り先づ話をしかけるが善い。そして若し話の種でも盡きて困つたなら、チョイ／＼折を見て接吻もよからう。上手な辯士も、辯舌が支えた時に水を飲むやうなもので、好いた同志が、手持無沙汰の時は接吻でもするが、先づ一番手際のよい逃げ道です。

ラオ ても若し接吻のおゆるしが出なかつたら何うします。

リロザ その時は願つて見るより外に仕方がない。さうすれば話が又違つ

て來ます。

ラオ ても可愛い戀人の前に居て、話の種が盡きるやうな事は有る筈がない。

リロザ 私がその可愛い戀人のロザリンドではありませぬか。

ラオ ロザリンドに見立てるのはそりや嬉しくないでもない。ロザリンドの名前は言ふても／＼言ひ飽きない。

リロザ ではロザリンドのつもりで返事をしますが、私費下を良人にはもぢませぬ。

ラオ それなら自分のつもりで返事をしますが、私死んで了ひます。

リロザ イヤ代理でも立て、死なせるが善い。世界開闢以來凡そ六千年にもなれど、でも自分の命を戀ゆゑに失つたものは一人も居ませぬ。

トロイラスの死んだのは希臘人の棍棒で撲られた爲めであります。しかもその以前に、立派に死んでも善いやうな失戀をしてゐる。この人が戀愛の標本と見做されて居るから驚き入ります。(トロイラス、クレニス、商人中にも引用せられたる故事也、トロイラスは)それから又リアンダーとて、戀人のヒーローが頭を叩めて尼さんになる位の事は平氣に見棄てて、五十、六十の年齢まで生き延びたに相違ないのであるが、たゞ眞夏の夕暮、ヘレスポントの海峡で水泳を試み、極樂の爲めに溺死を遂げた。それに當時のお目出度い物語作者達は、セストスのヒーローの爲めに敢なき最後を遂げたなど、申し渡して居る。(リアンダー、ヒ

當時マアローの筆にて世間に擴布せる戀愛譚也、リアンダーはアピドスの青年、夜な

／＼對岸のセストスなるヒーロー女を見んが爲めにヘレスポント海峡を泳ぎ渡り溺れて死す) 是等は皆狂言作者の筆加減、何れも皆眞赤な嘘詐、墓場の

底に埋れて虫の餌食となる人間の種は盡きねど、一人として戀故に死んだと申すものは居りはしませぬ。

ラオル 私のロザリンドに限つて、其様ナ薄情者にはさせたくない。ロザリンドの一顰一笑は、確かに私を殺す力がある。

ロザ この手では蠅一羽殺しはしませぬわいな。
と立ちあがりて、

ラオル さアこれから一調子をかへて、機嫌の善いロザリンドになり代りませう。何なりと御注文をなさるが善い。何んでも聽いてあげます。

ラオル では拙者を愛して貰ひます。
と眞面目になる、ロザリンド再び醜弄氣味となる

ロザ ハイ、愛してあげますとも、金曜なり、土曜なり、何時でも構へま

せぬ。

ラオ
ル シテ私の事を良人に持つてくださるので？

リロ
ザ 持つてあげなくて！二十人でも持つてあげる。

ラオ
ル 何と被仰る？

リロ
ザ て貴下は結構な御方でせう。

ラオ
ル そのつもりで居ますが……

リロ
ザ そんなら差支はないと思ひます。結構なものなら、たとへば欲しがり

過ぎて悪るい苦はありますまい。——さ、妹卿が牧師のつもりで、私達

を夫婦にしてたもれ。——オルランドさま御手を——

シリア二人の間に立ち二人の手と手をつなぐ

妹卿は文句を存じて居ますか。

ラオ
ル シツカリ御願ひ申しますぞ。

と餘り氣にとめぬ林にいふ

リシ
！ 妾には何と申して善いやら分りませぬ。

と笑ふ

リロ
ザ 先づ最初がやよオルランド卿は……

リシ
！ それならばやよオルランド卿はこれなるロザリンドを卿の妻と

迎へ玉ふや。

ラオ
ル 迎へますよ。

リロ
ザ でもそれは何時の事でムります。

ラオ
ル 無論今即座にです。妹さんの御手がまはり次第……

リロ
ザ それなら斯う被仰らねばなりません。——やよ、ロザリンド、余は卿

を妻として迎ふべし。

ワオル やよ、ロザリンド、余は卿を妻として迎ふべし。

と無頓着にロザリンドの手をとりて振り動かす

リロザ 牧師どのの御證明をお願い申します。――

とこれはシーリアに向ひていふ

が、兎に角、オルランドぬし、妾も卿を良人として迎ふべし……。ホイ花嫁さんが、牧師どの、先廻はりをして、了うた。全體婦女子といふものは、無闇に先きの事ばかり考へます。

ラオル 婦女子の考に限らず、すべての人の考には羽がある。

リロザ それはそうと、夫婦になつた上は、何年位連添ふ所思てお出でなされます。

ラオル 二世も、三世も未来までも。

リロザ 二日か三日とても被仰るが善い。駄目々々、オルランドさま、男子といふものは、口説き立てる時には彌生の時候、連添ふた後は師走の寒

空、又女子といふものは、處女の時は、皁月の花、一旦人妻となつて了へば、空模様がるで變つて了ひます。妾などは、バアバリの産の鳩のやうに焼餅を焼き、雨模様の鸚鵡よりも口入、笠しく騒ぎ、野猿よりも厭げく、猴よりも氣紛れを起し、成るべくお前が陽氣な時を選んで噴水の女神の像そのまゝに泣き立て、又お前が眠さうな顔をして居る時は、わざと猿狗のやうに笑ひころげてやります。

と後半を口早に疊みかけてのべえ、

ラオル でもロザリンドが其様な事をするかしらむ。

リロザ それは私が保證保証ます。屹度私がやつたやうにやります。

ラオル でもあの方は惘發惘發な婦人ぢや。

リロザ 惘發惘發でもなければ、この藝藝は出来ませぬ。人間は惘發惘發な者ほど我儘我儘です。婦女婦女の智慧智慧袋袋の戸戸を鎖鎖めても覽みなされ、窓窓から飛び出でます。窓窓を鎖鎖めれば鍵鍵の孔孔から出でます。鍵鍵の孔孔を鎖鎖めれば烟煙と一所一所になつて烟煙突突から脱ぬけ出でます。

ラオル 時にコレ、ロザリンド、私はこれから二時間ばかり他よそへ行いつて來こんければなりませぬ。

リロザ まア何なにうしませう！ 妾わたしには二時間も留とど守まも番ばんは出来ませぬわいな。
と半ば、眞面目に、半ば、つくりていふ

ラオル でも私は舊國ふるくに主ま様さまの御相伴ごよびをせねばなりませぬ。二時までには必

らず又戻つて來ます。

リロザ アー御出いでてなさい！ お出いでてなさい——お前の不實ふじつは夙もとから分わつて居ゐる。お友達ともだちからも聞いて知しつて居ゐりますし、妾わたしも大凡たいてい勘かづいて居ゐました。——口惜くちくしい、お前の上手うまな口車くちぐるまに載のせられて斯こんな事ことになつて了しまつて。——尤とも斯こんな目に逢あふのは妾わたし一人ひとりぢやない他ほかに幾いくらもある。——妾わたし死しぢまう——二時までには戻もつてお出いでてなさる？

ラオル アと戻りますよ。

リロザ 屹度さうですよ、本氣まことですよ、ギリ／＼決着けつちやくの懸値かひなしの話はなしですよ、善ようムいますか。若し、毛程けしでも約束やくそくを違ちがひ、決きめた時間じかんからたゞの一分間いっぴんかんでも遅おそれてお出いでてになれば、お前の事ことを活智いっせなしの大虚おほら言家ごんご戀知こいらずの不實ふじつ者もの、ロザリンドとか言いふ婦女おんなの良人りやうじんにはとてもなれる資格しきかく

のない、天下の不義者の中での第一等と思つてあげますよ。それゆゑこの妾に怒られぬやう、約束を固くお守りにならねばなりません。

ラオル そりや受合ひぢや。お前が全く私の愛するロザリンドでもあるやうに、後生大事に守つて見せます。それなら行つて來ますよ。

リロザ 約束違反者を查べるのは歲月が何よりの裁判者、萬事はこれに任せておいて、黙つて様子を見るときませう。行つてお出でなされませ。

とオランダ退場

リシロザさま貴嬢は只今のお言葉の中で、婦人一統の顔に泥をお塗りなされました。これでは、貴嬢の召して居る男子の服装を剝ぎ取つて、血で血を洗ふ不屈者の正体を、廣く世間に見せてやらねば承知がなりませぬぞ。

リロザ アイ貴嬢には、とても貴嬢などには、この妾の物思ひをお察しになることは出来ませぬわいな。アイ尤もこりや無理もない。妾の情思は底知らずの淵、何所まで行つても限界が分らぬのぢやものを。

と最も熱情を籠めていふ

リシロ 事によつたら底が無いかも知れませぬ。入つた戀は、そのまゝスイと抜けて出るのでムリませう。

リロザ 妾の胸はあのキニピッドがよう知つて居る。——眞實、妹、この兄はオランダの顔を見ずには生きて居られぬ。これから木蔭に行つて、あの人の戻られるまで溜息でもします。

リシロ 妾は又盡瘁でもします。

と兩人退場

第二場 森の他の一部

ザエークス、近侍、獵人多勢登場

ザエークス、近侍何れも獵服を着し、一頭の死せる鹿を引き出てる

クザエー
この鹿を打ち留めしは誰てムるな。

侍甲
拙者てムる。

イザエ
何うぢや各自往古羅馬に在りて凱旋の勇將を歓迎せると同一筆法を以て、この勇士を殿の許に案内致さうではないか。シテこの鹿の角を月桂樹の枝に見立て、勇士の頭の上に載せるのも頗る妙ぢやらう。——獵人達、何ぞこの場に適切な歌なりと知らぬか。

獵人
ないこともムりませぬ。



誰はしめ留ち打を鹿のこ 一ニザ
なるムて
るムて者拙 侍近甲

イザエ

早速歌ふて見せい。歌の調子などは何うでも構はぬ。たゞ賑かしになればよし。

歌

鹿を射とめた褒美の品は、
皮革の衣に鹿の角

これから歌で送るとし
ましよ。

(一全この囃子を齊唱
すること)

角をかつぐが何可笑からう、
 元からあつたかぶり物、
 爺も附けたよ鹿の角、
 親もつけたよ同じ品、
 氣味のよいく、牡鹿の角は、
 附けてちつとも可笑くはなし。

と一同退場

第三場 森の他の一部

ロザリンド及びシーリア登場

ロザリンド 何うしたのでムリませうチ。二時は過ぎて居るに、オルランドは影

も形も見せぬ！

リシア それは斯ういふ理由ぢやわいな戀のなやみに頭の中が有耶無耶
 に亂れて了ひ、ツイふらくと弓矢を手挟み、家出をして、そして――
 晝寝でもして居るのぢやわいな。アレ誰かゝ参りましたよ。

シルヴァイアス (第三幕第五場に出てたる田舎者にて、アイビー女の戀人) 登場

シルヴァイアス 貴下さまへ使者の役目を依まれてあがりました。アイビーが之
 を貴下の御手元に届けてくれとの事で。

と一通の手紙を渡す

手紙の内容は知りましねえが、手紙を書く時の、アノ凄惨い權幕、畏ろし
 い素振りから思ひやれば、何ぞ腹立まぎれの愛想づかしなどが書い
 てありさうてムります。萬望私の事は大目に見逃がして戴きます。私

は何にも知らねえだいの使の者てムります。

リロザ 不埒至極ナ手紙三昧、エい何ヲしてくれう若し之をしも忍ぶべくば、天下何物か忍ばれぬべきぢや。拙者を捉へて、面が醜いの無作法であるの男早魃があらうとも、いとしい氣持にはなれぬのと散々の雑言馬鹿々々しい誰が彼様ナもの、後尻を追ひ廻してやるものか。一跡斯櫛ナ事を手紙に書いて寄越す道理が那邊にある。——ハ、アお前ぢやナこれは、お前の入れ智慧でこの手紙を書かせたのぢやナ。

ウシル 飛んでもねえ、それは違ひます。俺は全く内容の文句を存じませぬ。フイ、ド、ビ、ーが自身で書きましてので。

リロザ コレ、お前といふ男はお目出度い男ぢやナ。色情狂にながかいつておる彼女の手を見るがよい。まるで革皮ぢや、煉火石の色ぢや。拙

者は多分舊い手袋でもはめて居るものと思ふて居た。然るにそれが正眞の手ぢやつた。まるで、ありやあ三どんの手ぢちテ。それは兎に角この手紙は確かに彼女の頭腦から出た物ではあるまい。背後に男の黒幕が附いて書いてやつたに相違ない。

ウシル イヤ全く彼女の自筆で。

リロザ デモこりや亂暴な酷たらしい手蹟ぢや。喧嘩腰でなぐりつけたといふ書風ぢや。こりや屹度拙者に向つて喧嘩を買ふのぢや。土耳其人がわれ／＼に反抗つた筆法ぢや。生優しい婦女の頭腦から何うして斯様ナ閻魔大王めいた文字が湧き出すものか。斯様な眞黒々ナ書く奴の肚は尙更黒さうな字が。——お前に一ツ讀んできかせうか。

ウシル 是非さうして戴きます。まだ一度もさいいた事がムりましねえ。尤も

彼女の劔突なら聞き飽きて居ますが……

リロザ イヤ拙者に對しても、フィービー流ぢやテ。さてこれより此夜又どのの手紙を読みあげるほどに何れもお氣をとめられませう。

(朗讀すること)

『主さんは百姓に妾をかへし神様に候や。

主ゆゑに少女一人が身を損す。

オヤ／＼女子といふものは斯んな鹽梅に悪口を吐くものかしら。

ザンイル ナニこれが悪口でムりますか？

リロザ (朗讀すること)

『それに何故なれば神さまらしくもなく、

かよわき女子を仇敵のやうにきらひ侍るや。

ハテ妙な悪口もあるものぢやテ。

『妾に向ひて他に秋波を送る人も候へども、

戀の矢は少しも妾の胸に立ち侍らず候。

人の事を獸物か何ぞと心得て居る。

『主さんの涼しい御目元に角立て、睨まれても、

尙ほも戀風のソグ／＼としみわたるこの妾、

若し其御目元にて秋波なりと賜はらば、

いかばかり不思議の效驗が御座候半。

口きたなく叱られた擧句に惚れたる妾、

口説かれた日には如何に心の溶け候半。

麗書の使者に立つたこの男は、

妾の戀にはまだ勤づかねンヤリ者、
諸君の御返事を何卒この者に托してたべ。

成らう事なら妾の赤心をあはれと覺し、

色よき御返事をさかせてたべ。

それでも否なら是非もない否と一言傳へてたべ。

その時は妾は迷途へ進むべく候かしく。』

ウシル これが悪口でムリまする？

と大に驚き呆れる

リシ ホンにも前が氣の毒ぢや！

ナニこの男が氣の毒ぢや？些ツとも氣の毒な事はない。全體お前
は斯な女が可愛のか。お前の事を道具に使ひ、善い加減のチャランポ

コを並べるお轉婆とてもやりきれたものぢやない。——兎に角女の
所へ行くがよい戀故に悉皆盡慮して了うて居るお前のことぢやか
ら。——私の返事は斯うぢや、——若し夫のフアイビーが拙者を受す
るなら拙者の爲めに前を愛すべし若しそれが不承知ならばお前
からの依頼がなまじ上は拙者は決してフアイビーを女房とせぬ。——
よくこれ丈をフアイビーに傳へて呉れお前が眞實戀を解する人間な
らば返ら去ね何も言ふな他に來客がある。

とシルヴァース退場

オリヴァー(即ちオランダの長兄也)登場

オリ 一寸お尋ねの儀がムリます。この森の片端橄欖の樹にとりまか
れて、一軒の羊小屋があるとき、食したが御承知はムリませぬか。

リシ | アノそれは方角は爰から西程近き谷間にござります。さらくと音立て、流る、溪流の縁柳楊の並木を右に見て真直にお出でになれば直に突き當るのでムリます。尤も只今時分は藻脱の殻、何人も内には居りはしませぬ。

この間オリサーア、と二人の姿を打ちまもり、何か心に思ひ當れるこなし

ウオリ | 實はたゞ人から聞かされた曖昧な話を楯の當推量若し間違ならばゆるしを願ひますが衣服といひ、年輩といひ、こりや何うしても、「若者は女にしても見まほしき顔容態度の工合は先づ姉人でもあるやう。又娘の方は身の丈低く、若者よりも日に焼けてゐる。」——モシ、拙者が尋ねる御方は貴嬢さまではムリませぬか。

リシ | 何にも勿躰らしう名告るほどでもムリませぬが、いかにもお言葉の通りで。

ウオリ | オルランドより御兩方に宜しくとの言傳にムリます。それから例のロザリンドさま、貴下には血汐に染んだ此手拭を渡してくれとの依頼——貴下がその御當人でムリませうナ。

リロザ | いかにもシテ此手拭を寄越されし次第は？
ウオリ | それには先づ拙者の耻辱を申し上げねばなりません。拙者の素性は何の誰、又これなる手拭は何所で、何うして、何故に血汐に染まつたか、一伍一什の物語、おさしになつてくださるか。

リシ | 是非伺ひ度うムリます。
ウオリ | 然らば少時御免あれ——さてオルランドは程なく戻る、戻つて見

せるの固き約束を後に、先刻愛を立ち出でましたが、さしかゝりたる森の細徑、辿るにつけても戀人の常として、甘くて苦き空想のとめどなく心にむらがる折しも、こはそも意外、不圖眼を道の邊に移轉せば、さて何物が眼に映つたと思召めす。たゞ見る、その枝は千年の苔みどりに、梢は古色蒼然と禿げ枯びたる樅の根方に、破れたる襦袢を身に纏ひ、むさくろしい、毛むくしやらの一人の男が、仰向けに假睡をして居たでは、ムラぬかシテ其首の周圍には、鱗の光目にまばゆき、一頭の青き蛇が、キリ／＼と蝮局をまき、すつくとばかり頭を突き立て、今しも件の男の開きたる口に近づき寄るでは、ムラぬかが、俄爾、オルランドの姿を見るとひとしく、件の蛇は蝮局を解き、右に左にうね／＼と側への藪へと一目散。藪には又、迫る肌渴のくるしみに胸の乳房もか

らびたる牝獅子が一頭眠れる男の早く起きよと、鼠を狙ふ猫そのまゝ、頭を地に押しつけて、いざと言はゞ跳びかゝらんずる間一髪——イヤ死せる者眠れる者を食はぬが、この猛獸の偉い所てムリます。事の様子をとくと見て、オルランドは更に一步眠れる男に近寄りました。するとそはオルランドの肉身の兄てムりました。

リシ
その兄の風評なら、所中オルランドより聞いて居ります。何にやらその方は、世にも珍らしい、酷たらしい人ぢやとやら。

新しく言ひつゝ、シリアは顔りにオヤヴァーを見る、又ロザリンドは單にオルランドの事のみを思ふこなし

ヴォリ
イヤさう言はれても致方はムリませぬ、かれの酷たらしい仕打は拙者もよく存じて居ります。

リロザ それよりか、オルランドは何うなされて？ そのまゝ兄を見棄て、
飢えた牝獅子の餌食とされましたのて？

ヴォリ イヤ一度ならず二度迄も、オルランドはそのまゝ立ち去らうと致
しました。しかし乍ら親切のなさけの露は心に燃ゆる復讐の焔を打
ち消し、肉身のよしみは日頃の怨にも打ち勝ち、終にオルランドはそ
れなる猛獸と格闘して物の見事に之を仕留めた。この騒動に果敢な
き假睡のばつとさめたる拙者の仰天！

リシ エッそれでは貴所がその兄御さまで？

リロザ オルランドの手に救はれたのでムリますか？

リシ アノ貴所ではムリませぬか、幾度かオルランドの生命を奪らうと
工まれしは？

ヴォリ いかにも拙者でムる。——が現在の拙者でムらぬ、生れかはつた今
の身に、昨日の非をば懺悔致すは、これも一ツの罪ほろぼし、心の雲を拂
ふ理由、少しも恥かしいとは思ひませぬ。

リロザ それは兎に角、血汐に染みしこの手拭の儀は？

とますくゝ氣の揉めるこなし

ヴォリ それは追々申上げます——さてわれゝ兩人が互に膝をつき合
せて、涙ながらの身の上話、拙者が爰に來た理由やら、何にや彼やの物
語は暫らく御預りと致し、一口に申上ぐれば、拙者はツマリ弟に連れ
られて舊國主さまの所に參上、新調の衣服と酒饌とを賜はり、弟と睦
しくせよとの有難き仰せに預かり、それより直に弟の住所へと案内さ
れたのでムリますが、やがて弟の身につけ居たる衣服を脱げば、腕の

左様丁度この邊りに、獅子が殺ぎとりたる生疵の痕がムりまして、今迄血は流れ次第に流れて居りました。爰で流石の弟も氣絶したれど、その間際にも口にはロザリンドの名を呼び立てました。

きゝ居るロザリンドは苦悶の聲を發す、シーリア立ちて之を扶ける

さてそれより拙者の介抱にて正氣に立ちかへり、疵口の繃帯も出来、暫時の後には元氣も恢復終に本人の望に任せて、土地不案内乍ら拙者がわざ／＼爰に參上、ツマリ一ツには弟が約束違反のお詫を申し、又一ツにはこの血汐に染みし手拭をば、戀人のロザリンドを假りに名告らるゝ若者に渡さん爲めの役目にムる。

ロザリンド強いて心を勵し、手拭を受取らんと手を差し延べしも再び

ガックリとなりて氣絶す、シーリア支えて席につかせる、オリヴァー背後に廻



さなう何…何まさ兄レアリシ
！にか確を氣おレコ？てれ

りて手慰ふ

リシ　アレ兄さま何…何うなさ
れて？コレお氣を確かに／＼！

ヴオリ　イヤ血汐を見ると氣絶する
ものが往々あるもので…。

リシ　これには別に深い仔細もム
ります—これロザ…アノ
兄さま！

ヴオリ　ヤア正氣が出られし御様子
ぢや。

リロザ　早う私は自宅へ歸りたい。

リシ 連れて行つてあげますとも。——アノ一寸オリツァー様、お手をお貸しなされてはくだされませぬか。

ウオリ コレ若衆、お氣を確かにお持ちなさらぬか、其様な事で苟くも男子と言はれますか、餘りといへば男子らしくもない！

ロザリンドを支え乍ら軽く肩を打つ、ロザリンドはッとするこなし

リロザ イヤ全くその通りで……。が見る人が見れば屹度この真似の上手なのに感心してくれませう。オルランド殿にお逢ひの折は、拙者の氣絶の真似の上手な所を是非お話しを願ひます、ヤレ、ドッコイ！

と身を起し足元も確かに歩み出す

ウオリ こりや確かに真似とも見えない。本氣も本氣、生命がけの仕事といふ事が、チャンとお顔に書いてあります。

リロザ 所が、實際真似なので。

ウオリ それならさうと致して置いて、精々元氣をつけて、男子の真似をなさるがよい。

リロザ 致しますとも！——尤も正直に言へば、私などは婦女に生れた方が相當な人間かも知れませぬ。

リシ アレお前は、お顔が段々蒼白めて来る様子、早う自家へ歸るとしませう。——貴所さまも何卒御一所に。

ウオリ それは是非同行します。戀人のロザリンドさまが、何と申して弟の違約の罪を恕さるか、それを伺つた上で歸らねばなりません。

リロザ 何とか工夫しませうが、兎に角私が氣絶の真似をした事は、是非被仰つて戴きますよ。さア参りませう。

と一同退場

第五幕

第一場 森の一部

タツチストーン及びオードリ女登場

チタツ 何れその中好い機會も見つかるぢやらうサ。今の所しばらく辛抱して貰はう。喃、オードリ。

ドオ それだッても、あの坊さまで澤山だッたわ。苦蟲家の旦那さんが、色々難癖をつけたけれど。

チタツ イヤあのオリヴァー坊主では仕方がないよ。あのマーテクスト上人

ては納まらないよ。時にオードリ嬢君に心を傾けて居る若衆が一人この森に御座るナ。

ドオ ア、其仁なら妾ア勘づいて居るだよ。憚りながらあんな男などに指でもさゝせはしねえ。——アレ来ましたよ、その男が……

チタツ イヤ拙者には田舎者が何より好物ぢやテ。何うも吾々の如き才人といふものは、色々面倒な仕事が多くて困ります。否でも應でも一寸翻弄つて見なければ義理が濟まない。何うあつても、こればかりはせずに居られぬ。

ワイリアム(オードリに戀慕せる田舎者)登場

ワイリアム えへへ、オードリさん今日は。

とオードリの居る方向に行く

ドオ 好いお天氣だ子、ウィリアムさん。

リウ 且那今日は結構なお天氣さまで。

と今度はタツナストーンに挨拶

チタ いかにも好い天氣ぢやナ、イヤ、苦しうない、帽子はその儘く。帽子などは脱ぐには及ばぬ。エー時に君は、當年取つて何才ぢやな？

と始終勿体ぶりにて鷹揚にいふ

リウ 當年取つて廿五になります。

チタ ム、善い年輩ぢや。君の名前は確かウィリアムぢやな？

リウ へー名前はウィリアムで……。

チタ 善い名前ぢや。君はこの森の出生ぢやつたな？

リウ へーお蔭様で……。

チタ 「お蔭様」とは甘く言つた子。お金はあるかな？

リウ へー御意にムります。

と得意らしく笑ふ

チタ 「御意にムります」とは難有い子。難有くて、涙がこぼれる子——と言つて見た所が、矢張りさうでもない子。御意にムる丈の語に過ぎない子。何にか君はお慥巧かな？

リウ へー且那、智慧にかけては大概の人には負けましねえて……。

チタ オヤ、君は仲々警句を吐く子。之につけて、拙者圖らず一個の諺を想ひ出したよ。馬鹿に限りて慥巧がり、慥巧に限りてわが愚を知るよく穿つたものぢやないか。往古ある所に一人の賢人がムつたが、葡萄を食ふ時は必らず口を開いたといふことぢや。こりや、つまり葡萄

は食ふべきもの、口は誰やらのやうにアングリと開いて居るべきものと實地に御教訓なされたのぢや。

かゝる無駄口の間、ワイリアムは次第にオードリに近寄る、オードリ厭がりて之を押し除けんと色々可笑しき態度をすること

オイ、コラ貴様はこの女に惚れてるな？

と俄に鋭くいふ

リウイ 惚れ抜いて居るだよ。

と一生懸命に怒鳴る、タツチ氣をかへ

チタツ イヤ君今後は御別戀に願ひたいチ。何うだ君は學問はあるかな？

リウイ ウンニヤありましねえ。

チタツ それなら君に教えてあげる事がある。持つは即ち持つなりぢや。書

に曰く、酒の壺をとつて之を杯中に傾くれば、酒は杯に盈ちて壺は自から空し。——これぢやナ。意中の人とはレコを指すといふことに就きては、凡ての學者間に異論はない。然るに拙者は其レコなのぢやから、君が意中の人たるべき筈はない。

リウイ 何……何ッちのレコで？

と睨が分らず、喫驚して居るこなし

チタツ 知れたこと、無論これなる婦人と結婚すべきレコのことぢや。右の次第故貴様のやうな百姓は、これなる女姓——女姓と申すは、俗にいふ女のことぢや——女姓の身邊に徘徊——身邊に徘徊とは百姓言葉でいへば附近にうろつくこと——徘徊するを斷念せよ——斷念とは碎いて言へば、あきらめることぢや。之を一口に纏めて申せば、

是なる女姓の身邊に徘徊するを断念せよといふのぢや。若し之に服従致さぬに於ては貴様の身命に危害を及ぼすぞ。イヤ曉り易く言つてきかせれば貴様の命が危いのぢや。語を換へていへば拙者が貴様のことを殺すのぢや。形づけて了うのぢや。首玉をすつて抜いて亡者の仲間入りをさせるのぢや。鐵の鎖で縛つて生涯身動きのならぬ目に逢はせるのぢや。勿論毒藥も盛る。棍棒も振りまはす。利刃も用ゐる。千變萬化の工夫を盡し、種々雑多の術數を以て當るざつと百五十通り位の殺し方を考へ出すのぢや。何んと畏ろしからう。早く逃げろッ!

と大意張りに相手の周圍を歩るままけり、一句々々に威嚇的の身振りをす
る、ウィリアム次第に恐怖の度を増し、逃げ足になる

ドオー さつち逃げてば、ウィリアムさん!

リウイ 眞……眞平御免……

とクス／＼笑ひ乍らいふ

と逃げ出し乍ら退場

コーリン登場

リコー 自家の若旦那様とお嬢様とが、お前さまを捜して居らつしやるだ、早く御座らつしやるが善い。さア／＼、さらばオードリ、急げ、拙者も直ちにまゐるぞ／＼、

と躍り狂ふて退場

第二場 森の他の一部

オルランド及びオリヴァー登場

ラオル　でも兄上、ほんの一面識に過ぎぬ女を愛すといふはチト嘘のやうではありませぬか。たつたと目見て戀しくなり、戀しくなつて意中を打ち明け、意中を打ちあけて先方が早速承諾——これで末長く夫婦の語らひが出来るものでムリませうか。

ウオリ　イヤ七六ヶ敷い穿鑿はせぬことぢや。女が貧しいだの、交際が浅いだの、急に意中を打ちあけ、急に話が纏つたのが可笑しいだのと、其様な事はまア何うても善いさ。私がアリエーナを好いたと言ふのだから好いたにして呉れるが善い。女の方でも私が氣に入つたといふのだから、これも氣に入つたにしておくさ。兎に角思ひ思はれた仲なのぢやから、卿へもそれに賛成して呉れるがよい。それが又卿の利益にもなるのぢや。父から譲られた家邸その他一切の所得は、皆卿に譲る

私の決心、私はこの土地で一生牧羊者で老い朽ちる所存ぢや。

ラオル　それ程までに思召すなら、何んで不服を唱ひませう。御婚禮は明日になさるがよい。お上を始め、近侍の方々は私が召んでまゐります。貴所も早く花嫁御に準備をさせるがよい。——オット私の許にも戀しい
ロザリンドが参りました。

ロザリンド(装男)登場

ロザ　お兄様、行つてお出でなされませ。

とオリヴァーを見送り乍らいふ

ウオリ　そんなら妹行つて來ますよ。

とオリウ退場

ロザ　私は卿がさうして、胸を縋帶して居る所を見ると、心配でなりませ

ぬ。

とオランダの方に向き直り、心配さうな思入



居る處を見よる心配なてまりせぬ
居る處を見よる心配なてまりせぬ

ワオル ナニ腕ぢやよ。

リロザ 私は又獅子の爪にか

けられてお怪我をされ

たのは、胸ぢやとばかり

思ふて居ました。

ワオル 胸にも怪我がありま

す。しかしそれは美人の眼でつけられたので……

リロザ それはさうと、アノ私が卿の手拭を見せられた時に、氣絶の眞似をしたことを、お兄様が被仰りまして？

といさゝか不安の色

ワオル 聞きましたよ。が、それ所でなく不思議な話がある。

ロザ リンド一寸考へ、直ちにさとれるこなし

リロザ ア、そのお話なら存じて居ります。全くあの通りなのでムリです。何所へ行つたとして、彼様なに燥急な話は滅他にありはしませぬ。先づオリヅァー様と私の妹とが或る所で出遇つたと思召せ。出遇ふや否や顔を見合はせ、顔を見合はせるや否や戀慕し、戀慕するや否や長太息つき、長太息を吐くや否や、お互に吐いた理由を尋ねあひ、そしてその理由を知るや否や早速善後策を考へ、とうとう乃て三々九段の梯子を造つて、直ちに婚禮の山に登りつめやうと急つて居るのでムリです。二人ともモ、熱度は百度以上、是が非でも一所に纏まらうと

いふ決心挺でも引き離すことは出来ませぬ。

ラオ
ル
そこで其婚禮はいよ／＼明日と決つて居るのぢや。舊國主様は私
が行つてお招待申す手筈になつて居る。——イヤこれにつけても、他
人の幸福をば指を銜へて側て見物して居らねばならぬといふは、い
かにも痛い事ぢや。うれしい人と千代の契をこめられるわが兄上の
幸福を思ひやればやる程、明日のわが身の失望は何れほど迄に深か
らうか。

リロ
ザ
アレそれなら、明日この私がロザリンドの代理をつとめませうか。

と落付き拂へるこなし

ラオ
ル
モ一眞似事丈では辛抱が出来なくなつた。

リロ
ザ
さういふ譯なら、私も下らぬ無駄を喋つてこの上御邪魔は致しま

すまい。實を申せば、私は貴所のことを器量すぐれし人物と、實際心か
ら敬服して居りますので、こりや眞面目の話ゆゑ、そのつもりであさ
いを願ひます。何にも褒めておいて、貴所から善く思はれやうの何の
と申す所存は毛頭もムりませぬ。たゞ貴所からホンの些少ばかり、私
の言葉に信用をおいて戴けばそれで宜しいので、ツマリそれは貴所
のお身の利益を圖るからのこと、自分の利益などは少しも圖る譯で
はムりませぬ。さア乃て私の信じて戴きたいといふは、私が魔法を使
ふといふことでムります。私の師匠と申すは、深く斯道の奥義を窺め
ながら、決して邪道に陥らざる非凡の魔術家、私は三才の頃よりこの
人に就いて學んで來たのであります。乃て貴所が眞にロザリンドを
愛して居るなら——果して外面に見ゆる通り、赤心から之を愛して

居るなら、貴所の兄上がアリエーナと結婚の式を挙げると同時に
貴所にもロザリンドと結婚させてあげます。私は目下ロザリンドが
いかなる境遇に陥つて居るか、充分承知して居るのぢや。若し貴所が
お厭でないならば、明日を期して正真正銘まがひなしのロザリンド
をば、疵一つつけもせず、必らず貴所の前に連れて来てお目にかけま
す。

オルランド少時思案のこなし

ラオ
ル
そりや一躰眞面目で言はるゝか。

リロ
ザ
これが嘘なら生命でもさしあげます。魔法使ひだとして、生命の惜し
いのかはりはムりませぬぞ。兎も角も明日は立派に晴衣を着かさ
り、又悪意な人々を招待されるがよい。若し貴所に明日結婚の思召さ

へあるなら、お望み通り、屹度別人ならぬ、あのロザリンドと首尾克結
婚させてあげます。

シルサイアス及びフィビー登場

オヤ私に戀慕して居る女子と、又その女子に戀慕して居る男とがあ
出ましぢや。

フィビー不平の顔してロザリンドに向ひ

フィ
これさお前さんは不都合ぢやありませんか。妾が差上げた艶書
を他人に見せてサ。

リロ
ザ
見せたのが何故悪るい？私は成るべくお前に對して憎嫉に、手酷
く當り散らす工夫を凝らして居るのぢや。お前にはチャンと實體な若
者が附いて居るではないか。よくそれを大事に可愛がつてあげるが

善い先方はお前を崇め奉つて居るではないか。

171 まゝ呆れる。この人はまだ戀愛といふものを知らないのだよ。シルヴァスさんはお前教えてあげるがよい。

シルヴァス本氣になりて

172 ヴシル 何んぢやナ、戀愛といふものは、溜息と涙との凝塊ぢや、フィービーさんに對して俺何時もそれぢや。

173 174 妾はガンニミードさんに對して何時もそれなんですよ。

と天袈裟に語調を強める

175 176 ラオル 私はロザリンドに對して何時もそれだ。

と靜かに獨語のやうにいふ

177 178 リロザ 私は——何所の女子に對してもそのやうな事はなひ。

Take care!

179 ヴシル 戀愛といふものは、何所までもうつらくと取りとめぬことを思ひ何所までも一生懸命、注文、澤山、何所までも崇めて仕へて、言ふことをさし、何所までも腰を低く、耐へて見たり、焦れて見たり、それから心を清淨らかに、苦勞をいとはず、何所までもかしてまつて言ふことをさく所にあるのだネ。——フィービーに對して俺何時もそれぢや。

180 181 妾はガンニミードさんに對して何時もそれなんです。

182 ラオル 私はロザリンドに對して何時もそれだ。

183 184 リロザ 私は又——何所の女子に對してもそのやうなことはない。

185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

とロザリンドに向ひていふ

ウシル 若しもさうなら好いたといふて何故この俺を叱つてくれるのだよ。

とファイビーに向ひていふ

ウオル 若しもさうなら好いたといふて何故この私を叱つてくれます。

と鎖に手を觸れる

リロザ アレ貴所までが何故其様ナ事を被仰るのです。

ラオル 私は爰に居ない言つたところが聞えはせぬ者に對つて言つて居るので。

リロザ モーく其様ナ同一文句の鸚鵡返しは飽きくして了うた。

シルサイアスに向ひ

出来ることなら私はお前を助けてやる。

ファイビーに向ひ

出来さへせば私はお前に戀慕してやる。——兎に角明日は兩人とも一所に妾の所に來るがよい。

再びファイビーに向ひ

若し私が女房といふものを貰ふものなら、屹度お前を女房に持つてやる。そして祝言は明日ぢや。

オerlandに向ひ

若し私の力で男の望みを協へさせることが出来るなら、屹度卿の望みを協へさせてあげます。そして祝言は明日ぢや。

シルサイアスに向ひ

若しお前の好いたものが、お前の心に協ふなら、その望みを協へさせ

る。そして祝言は矢張明日ぢや。

オルランドに向ひ

卿はロザリンドを慕ふて居る故、必らず来る。

シルヴァイアスに向ひ

お前はファイビーを慕ふて居る故、必らず来る。

又私は何所の女子も慕ふて居ぬ故、矢張り來ます。これてしばらくお

暇ぢや、何れも私の命令を忘れてはなりませんぞ。

サシ
イル 何事なりとも間違なく、

イシ
イ 何れ明日は、

ラオ
ル 屹度參上。

と一同退場

第三場 森の他の一部

タツチストリン及びオードリ登場

タツチ 明日はいよ／＼千秋萬歳、明日こそいよ／＼御夫婦様ぢや。

ドオ 妾もそれが待ち遠しくて／＼ならねえのだよ。天下晴れての夫婦
になりたいたと言ふたつても、なにもいやらしい事はありやしねえ。オ
ヤ落魄殿様の所の小僧さんが二人來たぢよ。

小姓二人ふざけ乍ら登場

姓甲 小 甘い所で逢ひましたネ、旦那さん。

姓乙 小 全く甘い所で逢つたネ、さ、坐れ／＼歌が所望ぢや、

歌つてあげるとも！真中にお坐ンなさい。

タツチ、オードリ、地上に坐る、小姓等も手を離して背後に坐る

姓甲 小 さア早速始めませうネ。勿^{もつた}躰振つて咳^{せき}拂ひをしたり、唾^{つば}液を吐いたり、

聲が^{こゝろ}かかれてるなと、申^{まを}譯^{わけ}をしたりするのは残らずち預^あり。聲が^{こゝろ}悪るい奴^{やつ}に限つてよく斯^{こゝろ}様^{さん}ナ事を言ひますネ。

姓乙 小 いかにもさうだ。さア合^あ乘^り然と構へて一所に歌はう。

小姓二人は指端を以て調子を取る、タツチは頭と杖とを振る、オードリ

は調子外れに首を振つて滑稽なこなし

歌

好^ずいた同志^{どうし}が手をつなぎ、

こらさの、よいさの、やれこのせ、

通る野道はふかみどり、



いよのさらこ、きなつな手が志同たい好^ず歌
【せのこれや、のさ】

今^{いま}が摘^つみ時^{とき}よめな草、

歌ふ小鳥もちよくと、

兎角^{とんがく}戀^{こひ}路^ぢは春がよい。

右も左も^{みぎもひだりも}麥^{むぎ}朧^{おろ}

こらさの、よいさの、やれこのせ、

二人^{ふたり}ねころぶあたりには、

今^{いま}が摘^つみ時^{とき}云々。

二人^{ふたり}は聲^{こゝろ}をはりあげて、

こらさの、よいさの、やれこのせ、

人の一生は春の花、
今が摘み時云々。

明日は野となれ山となれ、

こらさの、よいさの、やれこのせ、

戀のさかりは昨日今日、

今が摘み時云々。

最後の歌にて小姓の一人タツチの肩に手をかけて前後に揺ぶり、とい
背ろに引ッくりかへす、オードリ立って裾を拂ふ

姓甲 小
イヤ小供衆、歌の内容も下らないが、調子もさっぱり揃はないナ。

そりや嘘です。調子は立派に揃ひました。調子外れなどは些々とも

やらない。

イヤさうでない。斯様な馬鹿らしい調子をきかされちや、聴衆が迷
惑ぢや。さう早く歸れ、序でに聲を取りかへて出直せ！

と二人の小姓を逐ひ散らす、二人キヤツ、とさわいて逃げる

オードリ行かう

と退場

第四場 森の他の一部

番國主、エーミエンス、サエークス、オルランド、

オリサア、及びシーリア登場

番國 何うちやオルランド卿はかの少年が約束せし事を、一々事實と信

用致すか。

ラオル 時には信用して見ることがムリです。時には又、せぬことがムリです。つまり半信半疑若しやと思つて、さて其若しやを危む次第にムリます。

ロザリンド(装男) シルヴァイアス及びファイビー登場

ロザリンド 哲國主に向ひ

ロザ 兼ねての約束について今一度念を押します間、しばらく御辛抱をなされませう。お上におかれましては、若し私が首尾克くロザリンドを連れてまゐれば、確かにこれなるオルランドに嫁はされるのでムリまするな？

哲國 おゝ知れたことぢや。ロザリンドが百の王國を司配すべき身分ぢ

やとても、異存は申さぬ。

ロザリンド 今度はオルランドに向ひ

ロザ シテ又貴所も、若し私が首尾克くロザリンドを連れてまゐれば、必ずおもらひになりますな？

ラオル 勿論のこと、よしこの身が世界萬國の君主と仰がるゝ身であるとしても、異存は申しませぬ。

次にロザリンドはファイビーに向ひ

ロザ お前は又、若し私さへ承知の上は、女房になつてくれると申したな？

ファイ 祝言さへすれば、すぐに死んでも怨みません。

ロザ けれども、若し私との婚禮が、不服の場合には、これなる牧羊者の心

中男に身を任せてあらうな？

ハイ、受合ひますとも！

次にロザリンドはシルヴァニアに向ひ

お前は又フィビーさへ承知の上は、彼女を女房にすると言ひましたな？

女房にさへすりや、私はすぐに死んぢまつても怨みっこなしだ。

後で故障の起らぬ用心に、私はかく約束をきめた譯であります。殿様貴所は姫をつかはすとの御約束を破紙になされますな。オルランド様貴所はロザリンドを妻にもつとの約束を破紙にしてはなりません。フィビーさん、お前は私と夫婦になるのぢや、が若しそれが厭になつたら、これなる牧羊者と必らず結婚致すのぢやぞ、それからシル

ヴィアスさん若しフィビーが私を厭つた上は、必らず彼女と結婚するのぢやぞ、——私はこれより少時退出、一同の胸の疑惑を晴らさん用意に取り懸ります。

とロザリンド、シーリア退場

昔國 今の牧羊者の少年は、何所やら愛娘の姿に、そっくりの個所があるやうに思ふが……。

ラナル さればでムります。私も初めて彼者に出遇ひました時は、若しやロザリンド姫の同胞かと存じましたが、本來かの少年は此土地の産叔父なる者に就きて魔術の初歩を修めた者にムります。その言葉によれば、伴の叔父と申すは世にも稀なる斯道の達人、この森林の何所やらに跡を晦ませて居るさうにムります。

タツチストーン及びオードリ登場

兩人妙に氣取りて滑稽のこなし、ダエークス前方に進み出て

イデエ 察する所、こりやノアの洪水が、モ一度崩しかけて居るかな。餘程變
妙な牡牝の動物が二疋やつてまゐつた。こりや馬にあらず、鹿にあら
ず、天下に所謂「馬鹿」と稱する奴ぢや、(ノアの洪水の時多くの動物
が舟に集まれる聖書の故事)

チタツ いかにも方々、何れも御健勝にて祝着に存じまする。

イデエ お上には、ためしに一ツ彼奴を召びなされませぬか。珍らしい腹
からの阿呆森の中にて拙者既に何回も遇ひました者にムります。あ
れて元は何所ぞの館に奉公したことがあると言ひます。

チタツ その言葉に疑を挿むものがムらば、拙者を八大地獄の苛責にかけ
て吟味なされませう。憚り乍ら拙者は、舞踏の経験もムる。貴婦人に媚

を呈したこともムる。奸策を弄して親友を陥れ、又至極圓滑に敵と交
際を結んだこともムる。呉服屋を倒したること三軒に上り、喧嘩をし
たこと前後四回、一度などは將に決闘をも試みんばかりの場合に立
ち到りました。

イデエ それが何うして試みずに済んだ?

チタツ 左様、いよく出遇つて議論して見ると、争の點が決闘第七ヶ條に

該當して居たのであります。

イデエ 何うして第七ヶ條ぢや——イヤ殿様、面白い奴ではムりませぬか。

番 國 いかにも面白い男ぢや。

チタツ 拙者に於ても以後御別懇の儀を願ひ度うムります。さて拙者が今
日爰にまかり出ました譯は、ツマリ御近所のお百姓並に滑つたとか、

轉んだとか、一所になるとか、手切れをするとか、兎も角も一ツ祝言のお仲間入りを致したいので……一寸御覽じませ、この女の顔を！随分念入りの不じるしてはムらぬか、でもこれが拙者の所有物だから驚きます。他人が決して引っかけず、二の足を踏む奴を仕負ひ込もうとする拙者の氣紛れにも困つたもので、元來金満家は得て破屋に住むが癖、薄汚い牝糞の中には美しい眞珠が潜める道理。

この間タツチ刃越しにオードリ女を振りかへり乍ら喋る

オードリ不恰好な姿をして膨れ面をして睨む

昔國 イヤ中々こりや氣のさいた、穿つたことを申す男ぢや。

有りッ丈の智慧を絞り出すのが由來われ／＼の癖、毒薬は口に甘しの類でムりますな。

それは兎も角先刻の第七ヶ條は何ういたした、何故に喧嘩が第七ヶ條に該當して居つたのぢや。

めぐり繞つて、第七番の「謬語」を以て争ひましたので——これオードリ、其態度は何ぢや、見ッともねえぞ！——

と願みてオードリを叱る、オードリ大に嘔くなる

其次第は斯うてムります。拙者がある時、さる館勤務の役人を捕へ、その髭の恰好がまづいと申しました。すると先方では、お前はまづいと申すが、自分は善いつもりだと言ふ、これを禮式的反問と命名る。拙者が重ねて、お前の髭の恰好がまづいと申すと、先方では、これが自分の好みぢやと言ふ。之を「抑遜的冷語」と命名る。重ねて、お前の髭はまづいと申すと、先方では、其様ナ批評は取るに足らずと貶す。之を「鄙野的答

語と命名なづる。更にも前の罷はまづいと申すと、先方では、言ふ所當らずと答へる。之を「奮勇的詰責」と命名なづる。重ねてまづい恰好だと申すと、それは嘘だといふ。之を「挑戰的辨妄」と命名なづる。以下次第に「婉曲的謬語」、直接的謬語に達するのでムリます。

と勿体ぶりで、色々に姿勢を變へて脱く

「アエ 一體貴公は、先方の罷の恰好がまづいと、幾度繰り返して申したのぢや？」

「タツ イヤ拙者は、婉曲的謬語丈で止めておきました。先方でも、直接的謬語を拙者に酬ゆる丈の勇氣がなかつた。で、たゞ各自の劔の長短を比較した丈で、そのまゝ、物別れを致しましてムる。

「アエ モー一度今の七ツの順序を言ひ直せるかな？」

「タツ 勿論のことぢや。拙者などは常に書物に據りて喧嘩を致し、自己流などは決してせぬ。恰かも貴所方が「行儀作法」の案内書を用ゆると同様でムる。さア申し上げます。第一が「禮式的反問」、第二「抑遜的冷語」、第三「鄙野的答語」、第四「奮勇的詰責」、第五「挑戰的辨妄」、第六「婉曲的謬語」、第七「直接的謬語」――

と滔々として進みなく述べ立てる

右の中最後の「直接的謬語」の外は何れも決闘を避け得べき性質のものでムる。最後のものとて「假りに」の一語を付け加へれば又、避けられないでもムらぬ。或る時一場の争論が出来致して、七人の判官もその調停に困却致したことがムつた。が、右の争論の當事者が親おやから會合するに及び、一方が不圖、右の「假りに」といふ文句を想ひついて、假りに

足下がしかくの事を述べたとすれば拙者もしかくの事を述べたかも知れぬなどといつたのであります。これで二人の仲は忽ち氷解して断金の交を結ぶに至つた。この「假りに」の一語は、誠に重寶な仲裁役、その中には餘程の効能が籠つて居ますな。

と一揖してオードリの手を取り一方に退く

イザエ

殿様、今のは餘程奇妙な人物ではムりませぬか。何事にかけても人並に承知して居る癖に、それで何う見ても矢張り白痴でムります。吾國 イヤ彼者などは、その白痴を一種の假面として利用し、その下にかくれて盛んに機智を弄ぶ奴ぢや。

Wymen
婚禮の神ハイメン (當時の假面劇にはよく出て来る役、寛るき衣をつけ右手に炬火を持つ)

ロザリンド(女裝)及びシーリア登場

(物靜かなる奏樂)

メハ
ンイ

地にいさかひの波風もなく、

よろづの物皆その所を得れば、

天にも歡樂の響起れり。

いざ受け取りませ、國主、姫の身を、

それがし道々の案内を仕りて、

今日のむしろに天降れり。

あらためて、まことささぐるこの若人に、

千代萬代の深き契をゆるし候へ。

ロザリンド 國主に向ひて跪き

リロ
ザ

父上、幾久しう。

更にオルランドの方に向ひ

オルランド様幾久しう。

哲國 ヤッコレ、卿は確かにわが娘ぢやな！

と國主ロザリンドの肩に手をかけて擁す

ラオル ヤッコレ、貴嬢は確かにロザリンド姫でゐるな！

とロザリンドの手をとりて接吻す

「フイ ヤッこの見る眼、映る姿に相違がなければ、ヤレ、妾の戀はおさら

ばぢや！

と背ろの方に引きさがる

メハイン ヤヨ方々し、ばしの間鎖まり候へ。

折り重なれる珍談奇事の

千秋樂をわれ今つけむ。

それつらく、惟みれば、

爰にのどへる男女八人

皆赤繩もて縛るべきなり。

おこと等二人は艱難も分つべからず(ロザリンド)

おこと等二人は肝膽相照せり(オリヴァー)

おことは慕ふ男に身をまかせよ(フィリベアス)

さなくば女の良人に冊くべき也。

おこと等二人は又似たもの夫婦(ダットチストーン)

破鍋にとぢ蓋とはこの事也。

今より始むる祝賀の歌、

さくべき事はその間にきかれよ。
聚散離合の理自から明けく、
疑團忽ち氷と解けなむ。

歌

神の御手びき夫婦の語らひ、
千とせを契るめてたさよ。

此神ありてつきぬ人の世、
さらば祝へや今宵のむしろ。

千秋萬歳萬々歳、

世の守護神ハイメンの神、

哲國主シリリアを導き出て、席につかせ

哲國 姪御よう御座つたな——イヤ姪ではなうて娘ぢや、娘に逢ふより
もうれしい位ぢや。

フィービーはシルヴァイアスに向ひ

171 先刻の約束通り、妾はいよ／＼お前と夫婦——お前の義理にほだ
されて、ツイ妾も可愛くなつて了つたわいなア。

ド・ホイイス(オリヴァアの弟)登場、哲國主の前に跪く

172 畏れながらお上のお目通りに於て、一二言申上げたい儀がムリま
す。この晴れの席に使者の役目を仰せつかりし某は、何を隠さう、故サ
ーローランドの第二子にムリます。さて國主フレデリックに於かれ
ましては、近來有爲の人材が、日毎にこれなる森に馳せ参ずる趣をき
かれて安からず思召され、忽ち三軍を驅り催し、親から之を引率し、當

地に向つて進發致されました。取りも直さず、こはあ上を搦め奉りて御首を賜はらん所存、既に森の片端迄到着仕つてムりまする。

近侍の面々、ゲエーックス、オレルランド其他動搖めき立つて

哲國主を護らんとす

が、其所にてゆくりなく出遇ひましたるは一人の老僧、一場の間答の功徳によりて國主は忽ち翻然として前非を後悔、非道の謀圖と共に又浮世の俗縁をも抛ち玉ひ、國主の御位は元々通り御兄君に御返上、又兼ねて没收の所領は、配流の憂さを嘗めし近侍の方々に戻さるゝ事に相成りました。

一 同意外に驚くこなし

右申上げし條々、某の身命にかけて誓ひまする。

217
了

欠

MISSING

酬ぢや、(Fオルフン) 足下は戀女房と末長く連れそはれよ。その赤誠せきじゆんに對してこれ位の價値ねいちがある。(Iオリヴァ) 足下は財産と戀女房と、それから立派な親類筋とを、後生大事に守らるべし。(Sシルヴァ) 貴公はしつぱり、待ちに待つたる陸言りくごんをたのしむべし。(Tタツチスト) それから貴公は、後で夫婦喧嘩でもやらかすべし。貴公などがいかに戀の海に乗り出しても、糧食はものゝ二ヶ月とは續くまい。兎に角何れも御勝手御自由。拙者は飛んだり跳ねたりの御仲間ご仲間は御免蒙る。

燕國 コレ、デュークス、一寸待ちあれ。

Iケエ 馬鹿騒ぎの見物なら眞平まへらでムる。何ぞ御用の筋もムらば、殿様の空巢くわうに於ても待ち申して伺ひませう。

とデュークス退場

一坐しはらく白ける、チエークスの姿が見えざるに及び、

酋國主はホッと一息つきし軀にて一同に向ひ

酋國 さア始めたり〜！ いづれ終末は、めでたし〜て、まとまるべき
今日の儀式ぢやもの。

之を相闘に舞踏始まる、舞ひ終りて一同退場

獨りロザリンドのみ後に留り、幕外にて大詰口上をのべる

大詰口上

リロザ 大詰に女子の口上は、近頃異例とは存じますが、幕明の男子方の
口上に比べまして、さして不都合とも思はれませぬ、よい酒に看板が
御無用とあらば、よい芝居に大詰の口上などは、御無用な筈にムリま
すれど、兎角よい酒にはよい看板のある世の習慣之と同じく善い芝

居に善い口上が附きますれば、錦に花が添へます。然るに妾は面白
い口上も申さず、さりとて面白い芝居を御覧に入れることも致しま
せず、自分乍ら、これにはいと當惑して居ります。身に乞食の衣裳
はつけて居らぬ妾、今更お袖にすがりて歎願でもムりますまい。一ツ
御客様方に對して嚴命を下すと致しませう。先づ御婦人方から始め
ます。やよ世の姫御前、若し殿方がいとしいなら、遠慮なく此芝居を
喝采されよ。次ぎに、やよ世の男子方、若し姫御前が可愛いなら——平
生の御様子では嫌な方はありさうもムリませぬが——御婦人同様、
この芝居に喝采を惜むべからず。若しこのわたくしが、眞實の女子の
身でムりますなら、(沙翁時代の女形は皆若き男也)お髭の様子の善いお方、お顔の御色
の奇麗なお方、口中のほひの宜しい方々は、いづれも接吻してあげ

ましたものを！兎に角善い鬘善い顔色又善いいきづかひの御方々は、この妾の丁寧な御挨拶に對しまして、屹度御最負を賜はることに信じて居ります。

と退場

幕

御意のまゝ 終

譯文拾遺

本書の譯文には私意を以てわざと原文を省略せる箇所十餘所あり。爰にその拾遺を試む。行數は、マクミラン會社出版の「クラブ、エディション」に據る。

△第一章、第二場、二六—五九行

ロザリ これからは陽氣にします。そして何にぞ遊戯なりと考へませう。ハテ何が善からうか。戀に罹つた眞似などは何う思召す？

シリー マー、それが善うムりませう。その遊戯をなされませ。尤も本氣に殿方を愛するのは可ませぬ。縦令遊戯にもせよ、深入りは危険い。顔の紅葉のうひくしく格別後を濁さずに、手が引ける程に止

めておき遊ばせ。

ロザリ それなら外に何の遊戯が善うムりませう？

シリー では「運命」の媪さまを意地め抜いて車の輪から引き離してやりませう。さうすれば運、不運といふ事が無くなつて世の中が公平になりませう。(運命の女神は目隠しを廻し居る、車の輪の上下に動くのを人の運の不定なるに譬へたる也)

ロザリ ホンにさうしたいものでムンす。運の神の賜は大變出鱈目、殊に婦女に對して飛んだ間違ばかりして居ります。

シリー 全くてムンす。縹致のよいのは不品行に造り、品行のよいのは醜く造るのでムンすものを。

ロザリ あれ、その攻撃はお門違ひ、そりや
「運」の女神の役目でなくて、「自然」の母
の御役目ぢやわいな。運の神は浮世の賜
物を司り、容貌には関係がありませんね。

タツチストーン登場

シーリ でも子、「自然」が美人を造つても、
「運」の力で火の中に墜ちて醜い顔になる
ではありませぬか。「自然」が妾達に「運」
の神を嘲る丈の才氣を授與されても、
「運」の神が斯んな道化坊主の馬鹿を寄越
して、談話の腰を折るではムリませぬか。
ロザリ ホンに「運」の神は「自然」の母に對し
て苦手でムリます子。「自然」が造つた馬
鹿者(タツチストーン)を使つて、同じ「自然」の造

られし才人(自身等に)の邪魔をさせるので
ムンすものを。

シーリ 事によると、これも矢張り「運」の仕
業でなくて、「自然」の仕業かも知れませ
ぬ。「自然」の母は、妾達の才力では、と
ても是等の女神の品評などが出来ぬのを
認められ、この愚物を砥石がはりに寄越
されたのですよ。愚物は鈍なものではあ
れど、才人の才を磨くにはよい砥石でム
ります。これく才人！何所へ何うして
行かれのぢや。(最後の句は With, whither
に向ひて言ひかけた)
るなり、譯し難し)

△第一幕第二場六六—九七行

の中に發表される。

註、この問答は何にか時世に當て、諷せるもの
ゝ如し

△第一幕第二場一〇七—一二四行

シーリ 勝負とな！何んな色の勝負で？(色は
性質の意にて用)
わたるが如し)

ル・ギー 色と被仰りますか。何と御返事を致
してよいやら拙者には分り兼ねます。

ロザリ 智慧次第、運次第になされるがよい。
タツチ それとも『命數』の神々(三人)の命ず
る通り。

シーリ その返事は甘かつた。鍛てギュー
く壓しつけたやうな言ひ方ぢや。
タツチ イヤ若し拙者が列から突き出さるゝ

シーリ アノ、汝の申すのは誰のことぢや？
タツチ 御父君フレデリック様が御寵幸の方
で。

シーリ 父君の御寵幸とあれば尊重すべき筈
の方ぢや。モ一何も言ふことならぬ。何
れ其内汝は無禮の罪で鞭撻の刑に處せら
れるぞえ。

タツチ オヤくさかしい人が馬鹿な事をす
るのを見て、馬鹿者がさかしく評論する
のがわるいとはいよく以て歎ずべき事
柄ぢや。

シーリ 全く汝の言葉にも道理がある。馬鹿
者の智慧は出す事を禁ぜられ、さかしい
人のする馬鹿な仕打は、さも偉さうに世

に於ては……

ロザリ 汝は餘程元の臭味が失せて来た。

註、Raukには「列」と「臭」との二意あり、故にロザリンドは後の意にて洒落れたる也。

△第一幕、第二場、三五〇—三五八行

シーリ 若しも御身が、相撲の技にて豫想以上の働きをしたやうに、戀にかけても立派に約束を守るなら、御身の戀人は何のやうに幸福であらう。

△第二幕、第四場、六一—六四行

ロザリ あゝ此牧羊者の戀は、わが身の戀そっくりぢや。

タツチ わが身の戀にもぢや。最も私のはいさゝか舊くさくなつて來ることは來た。

△第三幕、第二場、三四—三〇行

ロザリ それなら其木に先づ汝を接枝ぎ、次に枸杞ぢや。さうすれば此木が國內で一番早く果實が熟するに相違ない。汝は熟せぬ前から腐る男であるし、又杞枸といふ奴も矢張りさうぢや。

タツチ これは御摺掬、しかしそれが果して名言であるか、ないかは森に判断させるべしぢや。

△第三幕、第二場、一七三—一八〇行

ロザリ そりや皆さしましたとも。さゝ過ぎる程聴きました。だつて詩句に釣合はぬほど脚が澤山ついでるのですもの。

註、Footは普通の脚といふ意と、韻律上の「音

脚」といふ意とあり。この兩意を合併せる也。音脚が多きに過ぎるを嘲ける也。

シーリ それは構ひませぬ。脚は詩を支持へるでせう。

ロザリ でも、あの脚は跛て詩句の外へ出せば倒れて了ひます。それ故詩句の中に在つても、いかにも足元が危げに見えます。

註、單に文字のシャレ故譯し難し。

△第三幕、第二場、二九〇—二九四行

オルク イヤさうでないよ。私は繪布にある文句をそっくり受賣りして居る。君の質問も矢張り其所から出て居るネ。

註、繪布とは種々の模様、題句などを油繪にてあらはしたる布地又はケンパス也。

ロザリ 君は中々敏活な頓智を有つて居るよ。

多分アタランタの爪の垢などで作つたものだらう。

註、アタランタは希臘神話の中の才氣ある美女也。

△第三幕、第四場、七一—一九行

ロザリ あの方の頭髪は依もしくない色でムンすわ。

註、當時は赤ら頭髪の色にて人の性質を判断し得べしとの俗説ありし也。

シーリ 幾らかデユダスの頭髪よりは赤色ぢや。必然あの方の接吻はデユダスの接吻の流儀で、當になりませんよ。

註、デユダスは十二使徒の一人にして、反問者也、その頭髪は通例赤色に齒かる。

ロザリ デモ全く、アノ方の頭髪は結構な色

てムンすわ。

シリー お立派な色です。色は褐色に限りませよ。

ロザリ それからあの方の接吻は聖餐のやうに神聖です。

シリー 神聖ですとも。月神の唇のやうです。冬の命の巫女の接吻でもこれより神聖とはまわりません。清淨過ぎて氷のやうに冷かです。

註、冬の命とは單に清きものを人化せるに過ぎず、シリーの前葉は離异的なりと知るべし。

△第四幕、第一場、四—六七行

ロザリ さうです、蝸牛です。蝸牛の歩行は遅いけれど、頭に家のをせて来る。君な

どが妻君に與へ得る遺産よりは結構らしいよ。のみならず、吉凶禍福の命數までも御持参ぢや。(妻君が不忠實なれば亭主の頭に蝸牛は其額に角が生いて居る故に其命數が既に定まつて居るといふ也)

カルラ 何んです。それは?

ロザリ 角さ。君達の如き者が女房どのから授かるやうな額の角です。しかし蝸牛は財産で、すっかり護つて来るから、女房の浮名などは立ちませぬ。

註、西洋にも女房が不品行なれば、亭主の額に角が生いるとの俗説ある也

オルラ 品行のよい女は角の製造元ではない。

シテ私のロザリなどとは品行がよい。

ロザリ 私がそのロザリなどぢやありませんか。

シリー オルランド様はかりにお前をロザリンドとお呼びになれど、お前などよりずツとお立派な御緻致の方ぢやわいな。

△第四幕、第一場、八二—八九行

オルラ でも戀ひしい愛婦の前に居て誰が困つて口が出なくなりませぬものか。

ロザリ イヤ私が若し君の愛婦であつたら、さうして見せます。さもなければ、私の操は餘程下等で、才氣よりも劣つて居る譯です。

カルラ 何んです? 私の願をさいてくれませぬて。

ロザリ 衣裳は知らねど、願はさいてやりませぬ。

註、Soreには願と衣裳との二意あり、故に文字上のシヤレをしたる也。

△第四幕、第一場、二六七—二七九

オルラ その様な才氣のある女房を持つ良人は「口は禍の門ぢや」と注意を與へるがよからう。

ロザリ イヤ其文句は滅他に使はぬがよい。妻の心が鄰人の臥床に飛ぶのを見るまでは控へて居らるゝがよい。(隣人との不義を指す)

オルラ 何のやうな才女でも、この辯解は出來まい。

ロザリ イヤその時はお前を捜がしに其所へ行つたといふだらう。舌がなければ兎に角、いかなる時でも女から答辯を得ぬ事

はありませぬ。自分の缺點を良人に塗りつける事が出来ぬやうな婦女には、小供を育てさせぬことぢや。屹度馬鹿な子にして下さい。

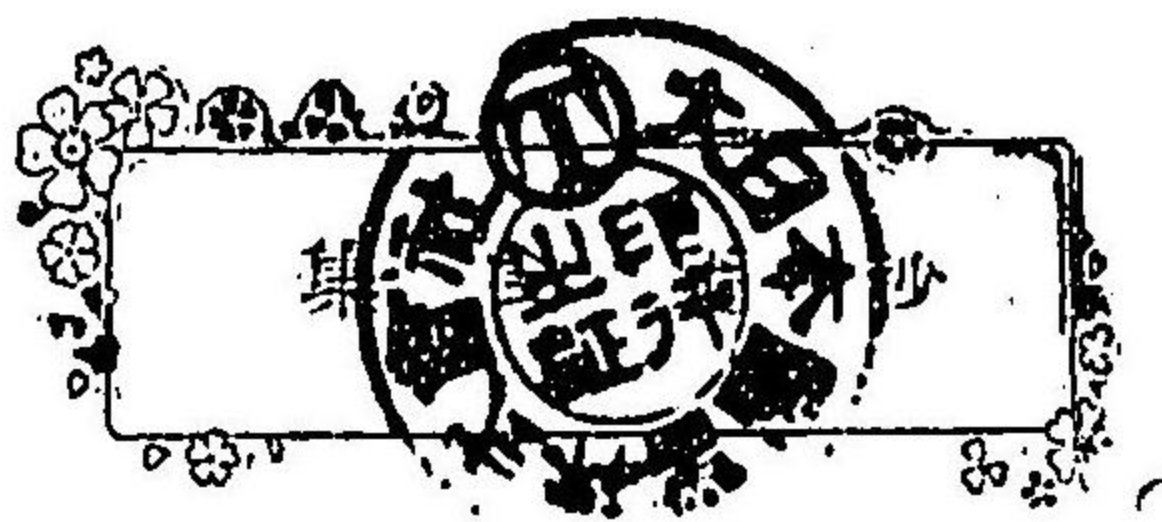
△第五幕、第四場、二六—三〇行

ロザリ (父に向ひ) 若し貴下が父でなければ、父は有ちませぬ。

(オルラに向ひ) 若し貴下が良人でなければ、良人は有ちませぬ。

(ワイに向ひ) 若しお前が女房でなければ、女房は有たぬ。

(終)



明治四十一年五月十五日印刷
明治四十一年五月十八日發行

御意のまゝ
定価金九拾錢

著作者

戸澤正保
淺野和三郎

印刷者兼

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地

代表者

事務取締役 宮川保全

發賣元

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地(振替貯金三一九番)

大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷(振替貯金二八六四)

大日本圖書株式會社支社

文學士 戸澤姑射 文學士 淺野馮虛共譯 (全部三十七卷)

沙翁全集

本集は抄譯に非ず梗概に非ず忠實親切を旨としたる完全譯なり文壇の至寶として永く後世に傳ふべきものは即ち是

◎第一卷	ハムレット	姑射譯	郵定	税金	八拾五
◎第二卷	ロメオ	姑射譯	郵定	税金	八拾
◎第三卷	ヴェニス	馮虛譯	郵定	税金	八拾
◎第四卷	オセロ	姑射譯	郵定	税金	八拾五
◎第五卷	リア王	姑射譯	郵定	税金	八拾五
◎第六卷	から騒ぎ	姑射譯	郵定	税金	八拾五
◎第七卷	シーザー	姑射譯	郵定	税金	八拾
◎第八卷	御意のまま	馮虛譯	郵定	税金	八拾

文學士 土井晚翠著 中村不折畫

東海游子吟

全壹冊 定價金 壹圓 郵税金 八錢

晚翠子歐洲に學ぶこと三年花に吟じ月に嘯き名山に躋り大川を涉り雄都勝地を訪ひ興廢治亂を觀じ奚囊爲に重し歸來その英を摘み粹を抽き以て本集を成す不折子亦形管を揮つて親しく會遊の迹を描き詩と煥發して錦上花を添ふ詩の適麗畫の奇峭加ふるに裝釘の高雅を以てす蓋し近時の偉觀なり

文學士 藤澤古雪著 帝國文學會藏版

史がらしあ

全一冊 定價金 五拾錢 郵税金 六錢

『がらしあ』は細川忠興夫人の基督教徒名なり夫人の最期は其敬虔なる宗教上の信念と武士的の感念と相因つて如何にも慘愴壯烈を極めたり古雪子今この好箇の資料を捉へ來つて一篇の悲劇を構成し靈妙入神の筆よくこれを眼前に活躍せしむ眞に劇壇の異彩たり加ふるに三上文學博士は特にこの篇の爲に『正史に見えたる細川夫人』なる一篇を草して之を添へられたれば華實兩ながら備はり讀者の興味勝けて言ふべからず

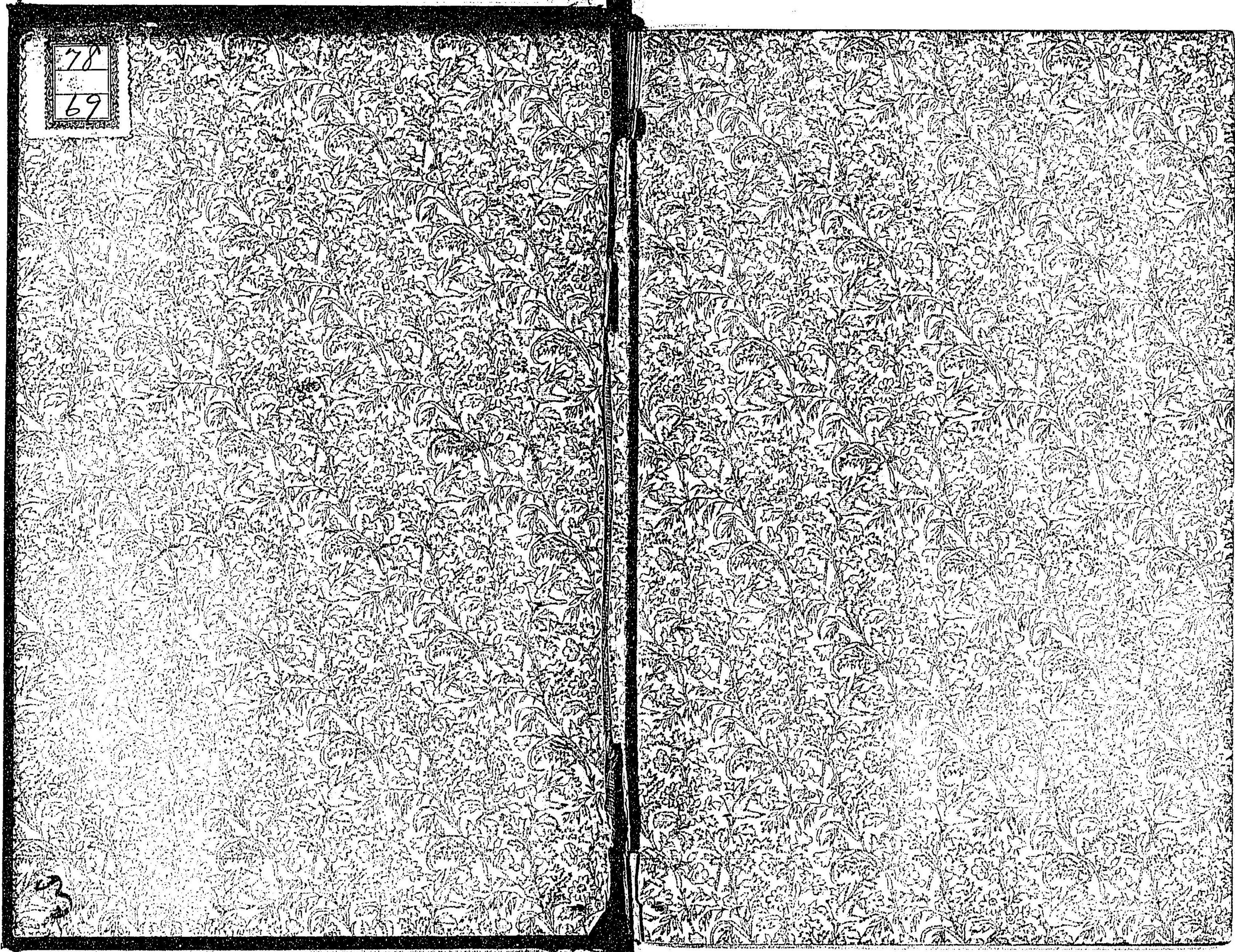
アービング原著
 文學士 淺野馮虛譯
 デッケン原著
 文學士 淺野馮虛譯
 ゴールドスマス原著
 文學士 淺野馮虛譯
 エマソン原著
 文學士 大谷繞石譯
 エマソン原著
 文學士 大谷繞石譯
 ホーソン原著
 松本信夫譯
 ジョーンズ原著
 芝野六助譯
 ワイニング原著
 文學士 片山正雄抄譯
 帝國文學會編纂
 帝國文學會編纂

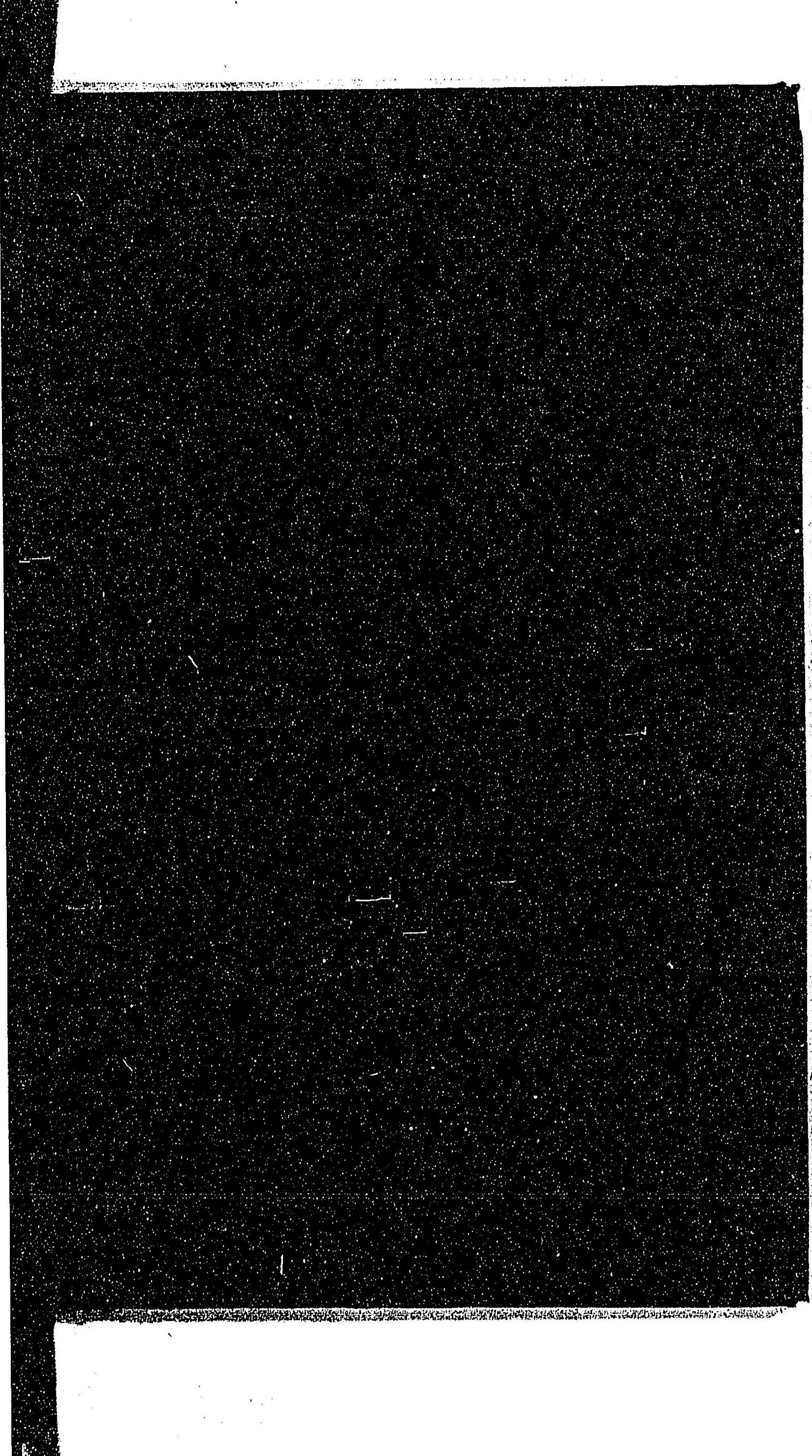
スケッチブック (二)
 クリスマスカロル (全)
 ヴイカー物語 (全)
 偉人論 (全)
 惠馬遜傑作集 (全)
 ツワイストールドテールス (全)
 羅世刺斯傳 (全)
 男女と天才 (全)
 シルレル紀念號 (全)
 文豪小泉八雲 (全)

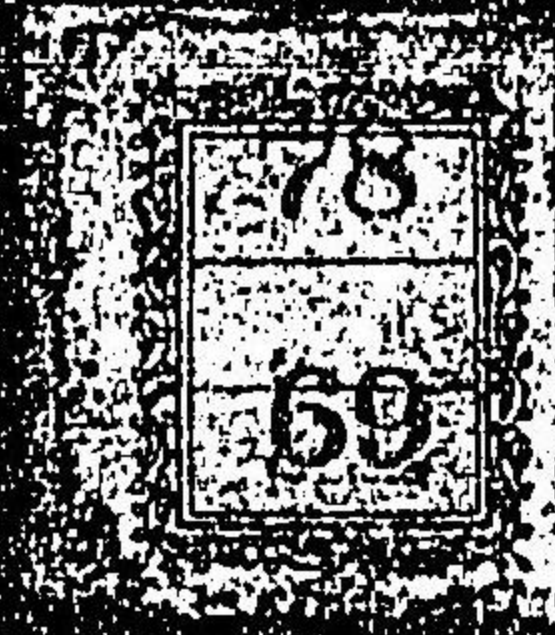
定價金壹圓
 郵稅拾四錢
 定價金四拾錢
 郵稅六錢
 定價金五拾五錢
 郵稅八錢
 定價金五拾錢
 郵稅八錢
 定價金五拾錢
 郵稅六錢
 定價金六拾錢
 郵稅八錢
 定價金四拾錢
 郵稅六錢
 定價金四拾五錢
 郵稅八錢
 定價金四拾五錢
 郵稅三錢
 定價金貳拾五錢
 郵稅二錢

78

69







101013-008-4

78-69

沙翁全集

シェークスピア/著

8

M38-42

DBY-0293

